

調査研究報告

身近な信仰世界を見つめて－お稲荷さんの現在－

文化社会学部「知のコスモス」展示会報告

杉本 浄

Report on a Research Exhibition of Present Cults of Inari (a God of Harvests)

SUGIMOTO Kiyoshi

0. はじめに

本稿は 2019 年 3 月 25 日から 4 月 19 日まで、3 号館 4 階展示室で開催した、文化社会学部「知のコスモス」展示会「身近な信仰世界を見つめて－お稲荷さんの現在－」の調査を含めた準備過程と実施内容について報告するものである。

本展示会は筆者のゼミナール、「アジア文明セミナー 1, 2」(3 年次春、秋学期)、「卒業論文 1, 2」(4 年次春、秋学期)を履修した学生たちによって企画・実施された。展示にあたっては文化社会学部からの手厚いご支援をいただいた。

最初に企画の発端から調査準備さらに実施に至るまでの状況について、続いて調査方法と展示の準備までを報告する。次に、展示室の構成について触れた後に、フィールドワークによる調査を中心に実際の展示内容を写真とともに再現してみたい。最後に本企画を反省的に振り返りつつ、今後の調査展示の方法について再考してみたい。

1. 調査の過程と展示会の準備

テーマの設定

事の始まりは 2017 年秋学期のはじめに、筆者のゼミナールに属する 3 年生の学生たちに、何か企画物をやってみないかと話をもちかけたことにあった。この時のゼミ生は 7 名で、皆なかなかの個性派ぞろいで、普段から意見が一致することは多くなかった。そのため何か企画物をやらせたら意外に面白いことが出来るのではないかと考えたのである。この時は何かしらフィールドワークをやり、その調べた内容を展示会で発表するという漠然とした流れだけが決まっただけで、肝心のテーマの設定までは至らなかった。結局、それから 2 か月強がすぎた 12 月になってようやく「お稲荷さん」をテーマにすることが決まった。その間に 1 人のゼミ生の要望で、翌年に南アジアの打楽器、タブラの演奏会を実施することも決まった¹。

「お稲荷さん」にテーマが定まった経緯はおそらくかなり現実的なものだったと思われる。調査といっても学生たちはそれぞれ授業や卒業論文、大学での諸活動、さらにアルバイトや就職活動など皆一様に忙しい状況にあったため、実現可能な範囲で何ができるかという問いがまず頭にあった。そうなれば、湘南キャンパス周辺か自宅近辺、あるいは出かけていった先々で調べられる内容になる。

こうして、学生たちが普段目にしていながら、その存在自体は詳しくは知らない身近な信仰世界に目を向けていくことになった。身近に見られる神々を探した結果、地蔵菩薩、馬頭観音、道祖神、稲荷神が挙がったが、南アジア関連のゼミでもあるため、できればインドとも結びつく神様で、謎に満ちているものにしようということになった。この時、インドのダキニ天²と稲荷神の関連について話しをする学生がいて、なんとなく面白そうだということで稲荷神に決定した。

調査方法と調査過程

稲荷信仰の調査方法については、これもまたいたって現実的な方法が取られた。まず、年末年始に自分たちの周りにあるお稲荷さんの写真を片っぱしから撮ってくる。できれば出かけた先々で何かしら稲荷を見かけたらそれも撮ってくるようになった。したがって、調査はあらかじめ本やネットから稲荷について念入りに調べあげ、それからテーマを決めて現場に行き、書いてあることの実を確認するという方法は取らなかった。まずは身近なお稲荷さんをきちんと把握するために写真を撮って、それをよく観察することからはじめたのである。さらになるべくお稲荷さんの周辺の解説板や石碑などから情報を得ていくことで、稲荷信仰の実態を理解していくことにした。

このやり方が功を奏したのは稲荷信仰の先行研究のドグマに陥らないで済んだことである。後に学生たちが気づいたように、稲荷信仰は極めて複雑な由来があり、その研究の幅も広く、先行研究の分析からはじめると、フィールドワークに際して身動きが取れなくなる危険性があった。あくまでも「現在」から思考し、シンプルな問いを設定して追求することを目指した。

翌 2018 年 1 月からは、学生たちが撮ってきた稲荷関係の写真をゼミの時間に研究室のパソコンの共通のフォルダーに収めていき、さらにディスプレイに映し出しながら、それぞれの写真についてディスカッションを重ねていった。すでにこの時点で、写真を撮ってきた学生は数名であったため、ゼミ生全員参加の調査という訳にも行かなくなり、学生リーダーを中心とする調査班と後の展示の手伝いなどを行うサポート班に自然に分かれていった。

その後、持ち寄った写真で分かってきたことを検証するために、春休み中に手の空いた時に稲荷信仰関連の文献調査をし、主要な稲荷研究を把握しておくよう、また聞き取り調査をやるための質問事項を準備しておくように指導した。

しかしながら、春学期に入ると就職活動で学生たちは一層忙しくなり、稲荷研究は一時的に立ち切れになった。ようやく再開したのは、7 月に入ってからのことである。すでに内定をもらった学生リーダーを中心に遅々として進まなかった文献調査を行い、文献リストを作成した。また、フィールドワークの準備についても、筆者の知り合いを通じて 8 月 3 日に川崎市多摩区

生田にて実施できることになった。この時はお寺と個人宅で聞き取りを行うため、大勢で訪問することは控え、学生リーダーと筆者の2人が調査にあたった。

秋学期に入り、卒業論文の中間発表の準備とゼミ企画の「インド音楽の調べ」の演奏会実施、さらに卒業論文の追い込みで学生たちは動けず、その間はお稲荷さんの写真収集を継続するだけで日々が過ぎていった。12月20日の卒業論文提出後に、ようやく展示に向けたスケジュールを立て、日付と開催内容について検討した。さらに翌2019年1月に、口頭試問の準備と並行して、展示の準備がようやくはじまった。学部提出する企画書づくりとポスター制作、また必要備品と写真の現像の発注を1月の間に行った。

この時点までで問題であったのは、フィールドワークを十分に行えていなかったことである。もともと学生リーダーは、その年2月2日に開催された秦野市今泉にある白笹稲荷神社の例祭、初午祭を調査することを予定していた。これは前年8月に行ったお寺での調査の前に、初午祭に調査対象を絞り込むことを学生リーダーが決めていたことによる。

学生の初午祭の調査内容をもとに質問項目を決め、さらに3月中旬に神社に連絡して聞き取り調査の申し込みを行った。幸いご快諾いただき、展示会開催ギリギリではあったが、3月20日に筆者を含め3名で神社を訪問し、権禰宜さんに聞き取り調査を行った（写真1）。



写真1 白笹稲荷神社での調査の様子（筆者撮影）

調査後すぐに内容をまとめて、制作中の解説ボードに加えることになった。やや前後するが、展示室での作業は筆者が海外出張から帰国した翌日の3月12日からすでに集中的に行っていた。この時の主要な作業は写真の整理とパネルボードへの貼り付け、展示ケースに入れる稲荷神社のブロックと紙模型、および初午祭で購入したお狐さんの飾りの据え付けだった。再び国内出張に出かける20日までにはいくつかの解説ボードを残し大半が仕上がっていた。しかしながら、筆者が24日まで国内出張で不在であったこと、3月25日の展示開始日が卒業式だったこともあり、結果的にこの間にゼミ生が集まらず、展示直前の追い込みの作業が出来なくな

った。これにより展示開始が2日ほど遅れてしまい、関係者の方々に多大な迷惑をかけることになった。

2. 展示室の構成について

出だしの構成

次に実際の展示の構成とその内容について触れたい。展示の流れについては、一応の構成をあらかじめ作ってあったが、展示室のパネルの位置や順番をどうするのかは、実際に作業をやりながら、何度か変更を加えていった。展示室に入ってすぐのところにタイトル・ボードと「開催にあったって」を教員と学生リーダーそれぞれ1枚ずつ、次に「はじめに」のボードを1枚張り付け(写真2)、立ち止まって読めるスペースを確保した。右に行くと展示室奥へと通じる参道に見立てた通路を作った。実際に神社を訪れているような雰囲気を出すために、通路に入るところの両側に、よく稲荷の祠の前に立てられている「稲荷大明神」の赤い旗をネット通販で購入して飾った(写真3)。計画当初は赤い鳥居を作ることも予定し、そのために廃材を集めていたが、結局これを作る時間がなく、断念せざるを得なかった。

続いて、参道を進むと稲荷神社の祠の大幅写真に出くわすように配置し(写真3)、左横に神道系の典型的な稲荷の祠について簡単な説明を付した(図1)。この祠の写真は調査の際に白笹稲荷神社の末社を撮ったものである。やり方はデジタル写真のデータをPDFに変換してから拡大したもので、A3で20枚ほどコピーした後にそれぞれを貼り付けて、四隅をボードで補強したものである。

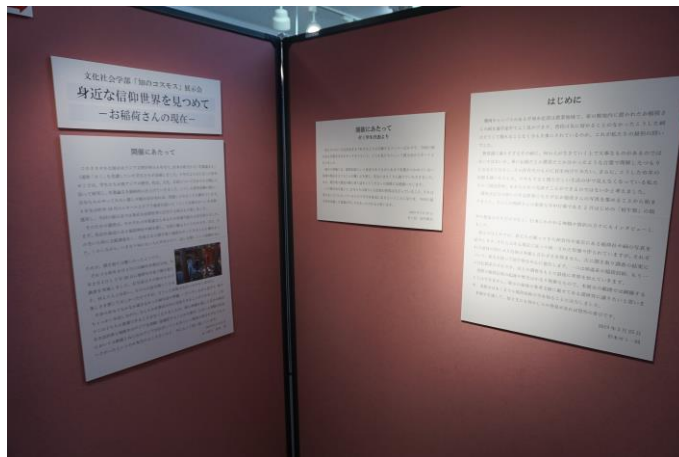


写真2 展示室に入ってすぐのところに「開催にあったって」と「はじめに」のボード（筆者撮影）



写真3 展示室の参道（筆者撮影）

稲荷の祠（神道系）

①稲荷神のお使いのお狐さん。入り口付近に2体、向かい合って座る。

②祓い清めのための鈴振りの縄

③しめ縄からつるされた紙垂

④紅白の提灯。熱心な参拝者が掛けたもの。

⑤内部中央に五穀豊穡の1をはじめ2柱

1. 宇迦御魂命(うかのみたまのみこと)

2. 大宮売命(おおみやめのみこと)

3. 猿田彦命(さるたひこのみこと)

⑥燈籠2基

⑦伏見稲荷でも有名な赤い鳥居。信者からの寄付で設置される。写真に見えるのは硬質塩化ビニール製のもの。大きさや物にもよるが15万円からネットでも購入できる。



（白笹稲荷神社末社）

図1 神道系の祠について解説したボード

写真調査から

続いて「身近にある信仰世界」と題し、学生たちと筆者が撮ってきた神奈川県や東京都にある稲荷神社の社殿や祠の写真を展示することで、稲荷信仰の大体の特徴を掴んでもらえるようにし、またそのバリエーションの多さに気づいてもらえるようにもした。最初に筆者が担当した川崎市多摩区について、地図上で確認できた大小8か所すべての稲荷関連の神社や祠を写真

と地図で紹介した(写真4、5)。これらを分類すると、神社として立派な社殿を持つものが3、洪水で別なところから引っ越してきた小ぶりの神社が1、かつての共有地とおぼしき丘に集落で講を作って維持管理している祠が1、もともと農家の敷地内に立てられた祠が独立しているものが2(したがって管理は一族による)、城址に鬼門封じのために置かれたとおぼしき祠が1であった。他、裏庭に稲荷の祠を置く家を多数見つけたが、調査、展示規模の制約もあり、今回は人が自由に入れる場所に限定して写真を撮った。

川崎市多摩区地図と稲荷の位置



図2 国土地理院で公開されている地図にAかHまで番号をふって写真と対応させた

出典 : https://maps.gsi.go.jp/globe/index_globe.html#8570/35.62025137/139.52736696/1/360/-90/0/&base=std&ls=std&disp=1&lcd=



写真4 川崎市多摩区で撮られた稲荷関連の神社および祠の写真ボード(筆者撮影)



写真5 川崎市多摩区で撮られた稲荷関連の神社および祠の写真ボードの残り2枚(筆者撮影)

これに続いて学生たちが集めてきた、自宅そばの神社や行った先々で偶然通りがかったところにあった祠などを写した写真を展示した。それらは神奈川県と東京都の8ヶ所に散在していたものである(図3、写真6, 7)。

写真を撮ったお稲荷さんの場所



図3 国土地理院で公開されている地図にaからhまで番号をふって写真と対応させた

出典 : https://maps.gsi.go.jp/globe/index_globe.html#8570/35.62025137/139.52736696/1/360/-90/0/&base=std&ls=std&disp=1&lcd=



写真6 右は神奈川県藤沢市の鶴沼伏見稲荷神社と同市辻堂にあった稲荷社、左は鎌倉市の鶴岡八幡宮内にある丸山稲荷社と大和市中央林間にあった稲荷社（筆者撮影）



写真7 右は東京都渋谷区の代々木八幡境内にある出世稲荷と新宿区にある稲荷神社。左は江東区の商店街にある白笹稲荷神社と文京区の妻恋神社内の稲荷の祠（筆者撮影）

以上、広域の稲荷信仰を写真で紹介した後に、「初午祭と白笹稲荷神社」と「稲荷信仰と仏教」について、フィールドワークで得られた知見をメモ風にまとめた解説文を写真と共に展示した。この箇所については、実際の展示写真ではなく、そこで使用された解説文から「です」「ます」調を省き、一部改稿した文章を用いる。まずは先ほどの「身近にある稲荷信仰」から紹介していきたい。

3. 身近にある稲荷信仰

稲荷信仰は一見多様で複雑な由来を持つとされる。京都の伏見稲荷系の神社が数多いことはよく知られているが、本展示では稲荷信仰の今を知ること注力したため、そうした複雑な経緯や歴史については、論末に挙げた参考文献に譲って、触れないことにした。

さて、お稲荷さんを調べていく中で最初に気づいたのは、何よりもお稲荷さんは家を守ってくれる屋敷守として、安心感を与えていることだった。さらに、農業地帯にその祠が多いことから、五穀豊穡の神、生産の神として大事にされていることである。このことは稲をくわえる狐に象徴された飾り、五穀豊穡と書かれた提灯、祠に収められたお札に収穫をもたらす神様の名前が記されていることからもうかがい知ることができた。たとえ農業をやめた家でも、引き

続き屋敷守として裏庭に祠が置かれている例も多かった。すでに指摘されていることではあるが、おそらく各地の屋敷神や生産の神が、様々な同類の神々とともに稲荷神に習合し、身近な祈りの対象となって広がっていったと予測される。その一方で、お稲荷さんを調べ歩く中で気づいたもう一つは、商売繁盛の商業神としての側面だった。初午祭に行った際に、境内で売られていた金色の小判を付けたお飾りが象徴的だった（写真8）。

以上、稲荷さんは家を守り、豊穰と商売繁盛という人びとの生活にとって大事な安心・安全、食の保障と生活の発展に繋がっていることから、我々が訪れた神奈川と東京の各地に祠が多く残っている理由ではないかと考えた。



写真8 白笹稲荷神社の初午祭で売られていた商売繁盛のお飾り（浪川唯奈撮影）

また、調査が進む中で伏見稲荷の勧請をしている神道系の神社と仏教系の稲荷信仰の2つがあることがわかってきた。次の4節と5節ではこの神道系と仏教系の稲荷について、双方にとって重要な年中行事、初午祭（2月上旬）を中心に、聞き取り調査をもとに明らかにしていく。初午祭の儀礼に携わる宮司さんや僧侶の方々、さらに仏教系に関しては檀家の方にも聞き取り調査を行った。

4. 初午祭と白笹稲荷神社

白笹稲荷神社（秦野市今泉）にて権禰宜である渡邊さんへの聞き取り調査（3月20日）

渡邊さんによると、2月の初午の日に（京都の）伏見稲荷に神様が初めて来たことから、初午の日は特にご利益が高いという。清少納言も『枕草子』の中で書いているくらい古くから行われてきたお祭りである。

神社には氏子型と崇敬者型の2種類あり、白笹稲荷神社は崇敬者型のため、地域や集落の神社という位置づけではない。秦野地域以外の方もお祭りのお手伝いをしている。氏子はいないため周辺の集落との関係はあまり強くない。

初午祭は例大祭として行われており、二の午、三の午とご利益があるとされる。初午の日に売られるおあげは神様のお使い(眷属)であるお狐さんの食べ物であり、神様の実行部隊であるお狐さんに食べ物を渡してよく働いてもらおうという意味がある。白笹稲荷神社ではおあげを笹に短冊のように吊るすが(写真9)、これはここの特有のものである。



写真9 白笹稲荷神社の初午祭にて本殿前の柵にかけられた笹にお揚げが飾ってあった(浪川唯奈撮影)

露天で売られていた陶製のお狐さん(写真10)を購入した際に、掛け声のようなものと、火打ち石を打つというようなことを露天商がした。渡邊さんによるとこの儀礼は民間信仰であり、神社にはないものだという。通例、お狐さんの置物は1年間手元に置き、一年後に神社に奉納する。また、誤ってどちらかのお狐さんが欠けてしまったら、対のお狐さんを調達して一緒に奉納する。2匹が対になっていることがかなり重要であるらしい。末社の入り口の周りには所狭しとお狐さんの置物が置かれていた。

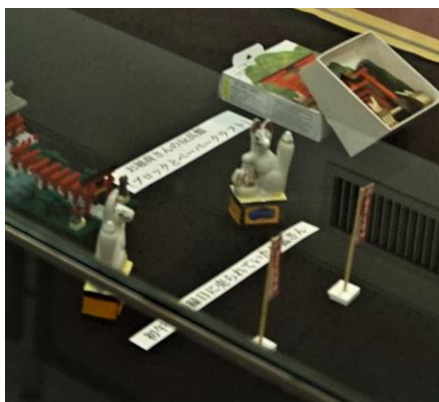


写真10 白笹稲荷神社の初午祭時の露天で購入したお狐さん(筆者撮影)

白笹稲荷神社にはいくつかのお社がある。末社は草や木や精霊を祀っている。熱狂的な信者になると、提灯や輪飾りなどを社殿にかけていく人があるという。その飾りなどはなるべく撤去せずにそのままにしている。七福神のうちの寿老人を祀る社も建てられている。崇敬者の方から寄進された権兵衛稲荷という稲荷社もある。権兵衛稲荷の「権兵衛」とは茨城県で代々庄屋を務めた家の当主の名前に由来し、奉納の際に従来の西末社と合祀したものである。また、稲荷は土地神なので、個人宅の稲荷には個人の屋号をつけていることが多い。こうした稲荷については、毎年お神札を神社から購入して家の祠に納める場合もあるが、個人でお神札を書いて簡単に済ませるところもある。



写真 11 末社への入り口（浪川唯奈撮影）

お稲荷さんの使いであるお狐さんは稲の神様で、白く綺麗なイメージがある（仏教系のお狐さんとはイメージが逆。忙しく走り回り、汚れている）。お狐さんは参拝に来る人の送り迎えもやる。ある横浜からの熱心な参拝者は、参拝の際に横浜駅でお狐さんが電車に乗ってきて神社まで着いてきてくれるという。帰る時も横浜駅まで見送ってくれる。お狐さんが行動できるのは神社から70キロ圏内ではないかという興味深い話もうかがった。



写真 12 初午祭（2月2日）で賑わう白笹稲荷神社の参道と境内（浪川唯奈撮影）

神道では時計回りに回るのがお参りする際の作法である。白笹稲荷神社の場合は、先代宮司が反時計回りの方がより良い運氣があるとし、参拝者には反時計回りを勧めているという。場所や環境によって、その神社独自のやり方を設定できるという。稲荷信仰には、緩やかでおおらかなところがあるとも渡邊さんは指摘していた。なお、屋敷神である稲荷を手放す際はお焚き上げをして処分する。お狐さんは別の貰い手があれば譲ることもあるそうである。その場合、対で2体あることが引き渡しの条件である。

以上が聞き取り調査から分かったことである。特に稲荷信仰には緩やかでおおらかなところがあると言う指摘は大変印象に残った。次に仏教との関わりについて紹介したい。

5. 稲荷信仰と仏教

観音寺とその檀家さん（川崎市多摩区生田）への聞き取り調査（8月3日）

調査を許可してくれた農家の松澤さんの家にうかがい、祭礼を執行するお坊さんのところで聞き取り調査ができる段取りをあらかじめつけておいていただいたため、すぐにお寺に向かった。真言宗豊山派観音寺の住職である岩田さんには、大変お忙しい中、一つ一つの質問に丁寧に答えていただいた。

岩田さんのお話しによれば、豊山派ではお稲荷さんは「ダキニ天の使い」とされる。観音寺の門前にもお稲荷さんが建っており、地名を取って五反田稲荷神社（写真 13）と称する。もとは鬼門守りとしてお寺の裏、北東（丑寅）に置かれていた。檀家の求めに応じて表に出すことにした。先代はしぶったため今の住職の代に移設されたという。元々あった裏には、代わりの祠を新たに置いた（写真 14）。



写真 13 観音寺入り口付近にある五反田稲荷（浪川唯奈撮影）



写真 14 観音寺裏、北東に置かれた代わりの稲荷の祠（浪川唯奈撮影）

岩田住職は、この北東の方角は儀礼においても大変重要であると指摘する。例えば地鎮祭を行う際の結び目も北東の方角になる。寺院の伽藍も同様。正面を北に右奥から結び目がある（写真 15）。観音寺の本堂、祭壇も北東に結び目があり、すべて鬼門守りの考えに則っているのだと言う。



写真 15 観音寺本堂祭壇。結び目は北東にある（浪川唯奈撮影）

位の高い順から言うと不動明王、茶吉尼（ダキニ）、稲荷。さらに稲荷の子分が狐である。稲荷はきたない神様で、50センチくらいの人型の神様だとされる。後ろ髪だけある禿げ頭で、いつも忙しく走っているという。天秤棒と稲穂と鎌を持ち、家々に冷害や病気に強いイネを配っている。そして、稲荷の祠は、稲荷神が実際にそこに泊まってもらうことを想定したもので、小さいものでよいという。

稲荷神への儀礼については、土地神、堅牢地神に似た作法でお経も決められている。真言宗豊山派では稲荷神のお経は、いずれもインド由来の大日如来（スーリヤ）、大黒天（シヴァ）、茶吉尼（ダキニ）の順でお経をあげるといふ。実際に観音寺に伝わる『稲荷明神供』のお経を拝見しながら、稲荷の儀礼が讃、主旨、行事、讃というように行われると説明を受けた。現在では声明で仏徳をほめたたえる讃の部分が省略され、全体として儀礼が簡素化されているという。

観音寺の檀家さんの松澤家での聞き取り

観音寺を辞して、農家の松澤さんのお家にうかがった。お話ししてくれたお婆ちゃんの出身は長沢（現在の東百合ヶ丘）で、ここから4キロほど離れたところにある。そこから代々農家を生業とする松澤家に嫁いだ。松澤家では米作りは30年以上前にやめ、現在は野菜中心に栽培している。トマトのハウス栽培なども手掛ける。調査中、このハウスで栽培していた美味しいブドウを振舞ってくれた。

家屋敷の裏手、鬼門の方角の北東にお稲荷さんの祠が置いてあった（写真 16）。お婆ちゃんの話では、嫁いでお坊さんがお稲荷さんを拝むのを知り、大変驚いたという。お坊さんに来てもらい、稲荷の祠を拝んでもらうのは初午の時期だけである。現在、観音寺では家が集まった講が4つあり、それぞれの講で、その年に決められた家1軒だけを回る。つまり、年ごとに持ち回りで決まった時に、松澤家にもお坊さんが来ることになる。ただし、不幸があった

杉本 浄

家は外される。

稲荷に関する年中行事はお盆、正月、初午の3回あり、その際、部屋ごとに榊もしくは竹飾り（写真17）を用意する。



写真16 松澤家の敷地裏の北東側に置かれた稲荷の祠
（浪川唯奈撮影）



写真17 飾りの竹串（浪川唯奈撮影）

初午について

初午の際の儀礼に用意するものは、お米1升、お酒、塩、果物3種類位（リンゴなどその時の旬のもの）、ろうそく、榊、柄つき瓶（写真18）。また、祠の前の木々を使って人型紙垂を垂らした縄をはる。おざつきという木の器（写真19）に赤飯と半分にしたおいなり（おあげ）をのせてお供えする。ここで使う紙垂は毎年暮れに観音寺さんからいただくものである。

祠の前に「稲荷利大明神」「五穀豊穰」「家内安全」の燈籠を掛ける（写真20）。先述したお酒とお米と塩は祠周辺の10ヶ所に蒔く。これは神様に食べてもらうために行うらしい。その後、住職にお経を唱えてもらう。

昔は、拝んでもらった後は鶏を絞めて、講に集まった人たちで余すところなく食べたそうだ。鶏の骨はうどんの出汁に使った。これが当時のごちそうだった（昭和30年代くらいまでか）。こうした集まりは子供たちの大の楽しみだった。後にごちそうは鶏からすき焼きに変わり、現在は家に集まるのではなく外ですませるようになった。



写真 18 櫛などを飾る柄付き瓶



写真 19 お供え物をのせるおざつき



写真 20 稲荷の祠の前に飾る燈籠（写真 18 からすべて浪川唯奈撮影）

5. おわりに

以上、展示会企画の発端から、調査過程、展示室準備、実際の内容までを報告した。牛歩の歩みでなかなか進まなかった調査と展示準備だったため、企画を持ち掛けた本人である筆者は、内心ハラハラしながら学生たちを見守り、ところどころでつついとおせっかいを焼いてしまったというのが本当のところである。その一方で、学生の自主性をいかに引き出し、形として具現化していくのかを考えさせられる日々でもあった。また、長らく展示を使った教育活動を行ってきた身としては、はじめて開室日に展示が間に合わなかったことの反省は大きい。

こうした波乱含みの企画ではあったが、内容自体は好評だったようである。4月19日まで展示会を続けたこともあり、新入生のための学内案内に立ち寄ってもらえた。結果、いつもの展示会に比べると大勢の人びとに見てもらうことができた。展示室の出口付近に置かれた、感想を記入して貼り付けてもらうボードにも、いつも以上の書き込みがあり、興味深かったという

趣旨の文が並んだ（写真 21）。

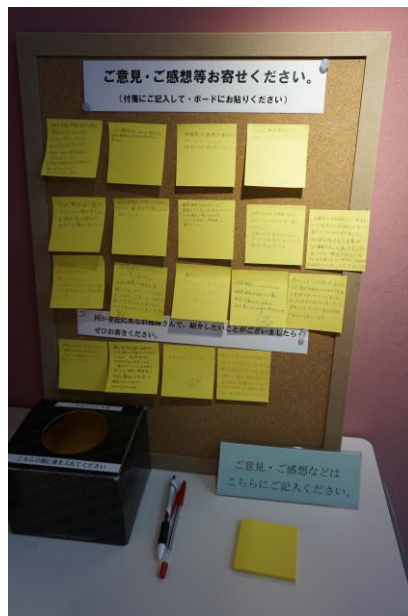


写真 21 展示室出口付近の感想ボード（筆者撮影）

最後に、今後とも展示を教育活動に生かしていく場合、学生の発想をどう汲み取り、調査に結び付け、展示として表現していけるのかを再考し、まとめていきたい。本調査展示はスケジュールの面と学生同士の連携の面では難点があったが、終始一貫、強制ではなかったこともあり、その発想の自由さや「共に手探りをしながら進めていく調査」という面では成功していたように思われる。これまで学生と企画する展示は、ややもすると何かしら形にすることを急ぐあまりに、学生側の発想や発見を根気強く導くことに時間があてられず、教員のアイデアを強制してしまうことが多かった。そうした場合、学生の役割は単なる展示の「お手伝いさん」に留まってしまう。もちろん、展示レイアウトの工夫などで学生の発想を活かせるところはあるが、調査展示の場合は発想と調査においてどれだけ学生側のアイデアが引き出され、それが生かされるかが重要である。

そうであるなら、調査展示を行う場合、完成までに少なくとも 2 年を予定した方がよい。また、学生と教員がお互いにフラットな状態で、手探りで調査を進めていくような環境づくりも大事になるだろう。これらに加え、指導する側にも最後まで結果が分からないようなテーマを選ぶことも重要であるし、何よりこうした調査に関心を持つ学生がいることも調査展示を実現させる不可欠な条件になる。

註

- 1 2018 年 10 月 22 日に「知のコスモス」演奏会「インド音楽の調べ～シタール&タブラ二重奏～」

として実現した。

- 2 「ダキニ」とはインド由来の密教の鬼神で、稲荷神と同一視されることもある。

主要参考文献

井上満郎『お稲荷さんお稲荷さんの正体 稲荷信仰と日本人』洋泉社、2018年。

大森恵子『稲荷信仰の世界－稲荷祭と神仏習合』慶友社、2011年。

大森恵子『日本宗教民俗学叢書 1 稲荷信仰と宗教民俗』岩田書院、1994年。

笹間良彦『ダキニ信仰とその俗信』第一書房、1988年。

谷口貢「東京の近郊地域における稲荷信仰－穴守稲荷の成立と展開をめぐって－」『文化（駒澤大学）』

第34号、2016年、pp.27-54。

秦野市史編さん室『秦野市史民俗調査報告書 丹沢山麓の講集団』秦野市、1982年。

秦野市史編さん室『秦野市史 通史2 近世』秦野市、1988年。

宮田登「稲荷信仰の浸透」下出積與編『日本史における 民衆と宗教』山川出版社、1976年、pp.237-256。